

「行学一如」の歴史的背景

——橋田邦彦の主張を中心にして——

石 井 公 成

一 「行学一如」の疑問点

曹洞宗系である学校法人駒澤大学に属する駒澤大学・駒澤短期大学では、建学の精神は「信誠敬愛」とされ、あるいは「行学一如」が建学の精神であって、「信誠敬愛」はその実践徳目であると言われてきた。特に近年では「行学一如」が強調され、大学の前身である江戸の施檀林以来の伝統だとされる場合が増えたように思われる。学校法人駒澤大学以外の曹洞宗系大学としては、東北福祉大学が「行学一如」を掲げ、駒澤女子大学では「正念」と「行学一如」を「建学の精神」としており、愛知学院大学では「行学一体、報恩感謝」と称し、「行学一如」でなく「行学一体」の語を用いている。

その「行学一如」の語については、早くから疑義が示されてきた。校歌にも見える「信誠敬愛」の句については、大正十四年に曹洞宗大学から駒澤大学への転化をなしたとげた忽滑谷快天学長が、同年五月に発表した「学風の建設」(『第一義』

二十九巻五号)と題する小文において提唱し、その定義づけを行なっているのに対し、「行学一如」は典拠が見当たらず、建学の理念と称されるに至った経緯も明らかでないためである。この問題について昭和六十二年から問題提起を重ねてきた駒澤大学法学部の関口雅夫教授は、停年退職を前にしてそれらを集成し、平成十六年十月に「駒澤大学の「建学の精神」についての史的考察」と題する論考を学内雑誌に発表して「再考」を呼びかけた。⁽¹⁾ 教授は、「本学の高名な知識」から、「行学一如」という四字熟語は、陽明学の「知行合一」の思想の影響からこれを仏教的にアレンジしたものではないか⁽²⁾、道元禅師の「身心一如」などの「二如」の思想が根底にあって「戦時中に喧伝された「行学一如」を取り込む形で使用されたのではないか」、「この言葉は、第二次大戦中の学徒動員令で学業を捨てて戦場に赴く学徒を激励するときの理論的根拠として盛んに喧伝された言葉である」と教示されたと記している(二〇九頁)。関口教授は、忽滑谷学長が仏教らしからぬ「信

「行学一如」の歴史的背景（石井）

誠敬愛」という徳目を強調したのは、当時の文部省が宗教教育を否定し、それまでの曹洞宗大学という名称や仏教学部の存在を認めない大学令を制定したことに対応しようとして、大学の名を駒澤大学と改め、文学部を設置してその中の一学科として仏教学科を置くための苦肉の策であったと推定する。そして、昭和二十八年六月に新制大学二代目総長となった衛藤即応総長が、宗教教育が再び可能になったことに触れつつ行なった訓辞、「駒澤大学の教育理念について」は、事前に教授会で話して承認されたものでありながら、「信誠敬愛」も「行学一如」も出てこないことに着目し、意図的に避けたものと見る。この衛藤総長の訓示は、道元の一生を貫く自覚だとして「他は是れ吾に非ず」の句を紹介した後、次のような痛切な言葉でしめくくられている。

この前申したように、私は十年前この壇上に立つて、学徒出陣を送ったその時、「死んで帰るのではない、生きて帰れ」といった。その当時私は防空壕に入つて命を惜しんだそのお蔭で生き残った。老骨に鞭打つて今度は諸君の先頭に立つことになった。戦争では幾百万の同胞が血を流された。国土は焦土に帰した。そして新しい意義をもつ日本がいま建設されようとしている。諸君はその重い責任を率先して負う覚悟をせねばならない。その諸君が歩くことを忘れて、他人を代りに歩かせてはならない。「他は是れ吾に非ず」もう一度繰返して諸君の自省を求めてやみません。

最近では、「行学一如」について論ずる者が増えたためか、二〇〇五年十月十五日に刊行された「駒澤大学学園通信」二六五号第一面の無署名エッセイ欄「一転語」では、「行学一如」の語は、保坂玉泉総長が曹洞宗教化研修所の所長を兼ねた際、「研修所の基本理念として」掲げた言葉が「いつの間にか大学の理念となってしまった」と述べ、「信誠敬愛」と「行学一如」を包摂した明確な教育理念を示すべきことを示唆していた。衛藤総長の後を継いで昭和三十三年八月に就任し、教化研修所長を兼任した保坂総長は、昭和三十九年八月に急逝しているため、関口論文と「一転語」によれば、この期間に「行学一如」が登場したことになる。しかし、衛藤総長は、摸索の結果なのか、「駒澤大学新聞」七十五号（昭和二十九年四月十五日）に掲載された入学式での式辞において「本学設立の精神を体する行学一如の学風」と述べており、同紙の百号記念号（昭和三十二年五月十八日）に寄せた小文でも、「本学が「行学一如」の学風を、すでに教育の本旨としていることは諸君ご承知の通りであります」と明言している⁽⁴⁾。

続く保坂総長は、その立場を受け継ぎながら「行学一如」の語を用いないことも多かった。たとえば、「昭和三十七年十月十五日 開校八十周年記念 駒澤大学総長 保坂玉泉述」と表紙に記す『禅の教育』というパンフレットでは、駒澤における「禅の教育」の特色について力説しておりながら、「行

学一如」にも「信誠敬愛」にも触れていない。同じ日に刊行された『駒澤大学八十年史』の「序」でも、保坂総長は「この禅的教育を行学一致とか身心学道と称して学徒の目標とし、信・誠・敬・愛の四大綱領を掲げてその実践徳目としてゐる」と述べるに止まっている。なぜ、「行学一如」でなく、「行学一致」「身心学道」なのか。同書の「跋」では、藤田俊訓学監が「現在千人しか収容できぬ講堂、七十人しか坐れぬ坐禅堂では真の行学一如の教育は徹底せぬ実情」だと述べ、「行学一如」の語を用いているだけに不審である。

総長就任とともに駒澤高等学校長を兼務した保坂総長は、高校長は昭和三十五年十月に辞任したものの、駒澤大学八十年の翌年にあたる三十七年十一月十三日には、高校のために「行学一如」の額を揮毫するなど、⁽⁵⁾「行学一如」を用いる場合もあった。その保坂総長の後を承けて高等学校の発展に努めた上野（あがの）慧賢校長は、昭和四十年三月一日刊行の校内誌に寄せた「信・誠・敬・愛」について」と題するエッセイでは、「実生活に於いて行と学とが一致しなくてはならない」と述べているため、保坂・上野という系統では、「行学一如」を「行学一致」の方向でとらえる傾向があったことが知られる。その上野校長は、昭和四十三年三月十六日発表の「駒沢大学高等学校建学の精神」という文章では、「本校は、駒沢大学建学の精神をそのままに伝承し、生活の基調を信・

誠・敬・愛の四徳に置き、これを貫くに「行学一如」の精神をもつてしている」と述べている。⁽⁶⁾この少し前あたりから、建学の基本精神は「行学一如（一致）」、その実践徳目が「信誠敬愛」だとして二つの標語を折衷した保坂総長の図式のもとで「行学一如」が定着したのであろう。

保坂総長の後を継いだ山田霊林、樽林皓堂、岡本素光の各総長については不明だが、昭和五十三年九月に総長に就任した大久保道舟総長（昭和五十六年まで在職）の名で出された「新入学生諸君への提言」（刊行年不明）では、冒頭の頁に総長自身の筆による横書きの「行学一如」の書の写真が、また次頁には「信誠敬愛」の縦書きの書の写真が掲げられ、本文で説明がなされている。これ以後、総長が代わるたびに、「行学一如」と「信誠敬愛」について説明した小冊子を、主に新入生を対象として配布することが慣習となったようである。

ただ、関口教授が指摘したように、建学の精神ないし理念に関する歴代総長の解釈が様々であって中国思想風な説明や神道風な説明が見られたり、苦しい記述が混じる場合もあるのは、「信誠敬愛」が儒教の徳目ばかりで、また「行学一如」の明確な典拠がなく、自分なりに意義づけざるをえないからであろう。本年（平成十八年）四月の入学式で配布された『旃檀林の若き獅子たちへ——建学の基本理念——』と題するパンフレットにしても、大谷哲夫総長は、道元の「身心一如」

「行学一如」の歴史的背景（石井）

「修証一等」「行解相応」などの言葉から「行学一如」の語が生まれたと説き、「行解相応」について、「修行と学問はあい応ずるとも説かれます」（四頁）と述べている。だが、道元の著作に見える「行解相応」の用例にあつては、「相応」は通常の仏教用語、つまり、*samprayukta*（結びついた）などの梵語の漢訳表現として用いられており、しかも「正師」や「仏祖」について言われている。坐禅を何よりも重んじつつ、經典を決して軽んじてはならないと主張した道元は、「行・解」と「相応」してこそ、つまり真の意味で兼備してこそ「正師」「仏祖」たりうることを強調したのみなのである。「行」と「解」とは互いに「相い応ずる」関係にあると説いたのではない。

二 教育機関における「行学一如」とその類語

「行学一如」「行学一体」は、曹洞宗の系列校では禅の思想、あるいは道元の思想に基づくと言われてきた。しかし、これらの語は道元の著作に見えないばかりか、中国・日本の著名な禅宗文献にも登場しない。駒澤関係の禅研究者が総力をあげ、昭和五十三年に完成させた『禅学大辞典』（大修館）にも、「行学一如」という項目は存在しないのである。逆に、曹洞宗系ではない学校が、「行学一如」やそれに類した語を教育理念としていたり、校歌に用いたりしている例が目立つ。

たとえば、平成十八年八月十日時点でインターネットで検索しえたうち、戦前から存在していたか、終戦からさほどたずに創立された学校で「行学一如」を校訓としている例として、富山県立桜井高校、山形県立酒田北高等学校、学校法人石川高等学校などがある。また、岡山県立津山東高等学校の校歌には、「かぎす理想の誇らかに 行学一如の道をゆく」とあり、兵庫県立小野工業高等学校の校歌は、「行学一如を誇りにて いざやすすまんわれら健児」と歌っている。県立高校、それも実業科を有する高校の例が多いのはなぜなのか。「行学一体」については、「行学一体の禅学塾」の必要性を説いてきた臨済宗・妙心寺派管長、梶浦逸外師が昭和三十年に創設した正眼短期大学が、これを建学の精神としている。⁽⁷⁾ 作務を重んじる禅宗としては当然なようだが、「親鸞聖人のみ教えに基づき、一人ひとりの人格の完成を目的とし、全人教育を行うことを理念」とするという室蘭大谷高等学校も、「校訓」は、「報恩感謝⁽⁸⁾、行学一体、自己反省、心身壮健」であり、順序こそ違うものの、最初の二つは愛知学院大学と同じである。「行学一体、文武両道」を目標とする鹿児島玉龍高等学校は、曹洞宗の玉龍山福昌寺の地に昭和十五年に創立された鹿児島市立中学校と鹿児島市立高等女学校を前身としており、曹洞宗と多少関係がある珍しい例となっている。

「学行一如」については、明治十五年に内務省所管の官立専

門学校として設立された神宮皇学館が、「学行一如」という教育方針で国士的人物の養成につとめて来」た結果、明年四月から大学に昇格して予科一年を募集するという記事が、昭和十四年十二月五日付けの『東京日日』紙の記事に見える。また、京大仏教青年会の活動にあきたりなかった求道的な学生たちが久松真一助教授と出逢うことにより、久松助教授を中心とする「学行一如」の参禅団体「京都大学学道道場」が、昭和十九年四月に発足している。その綱領の第一条は、「本道場は絶対の大道を学究行取し、以て世界甦新の聖業に参ず」であった。この団体が昭和三十三年に改名してFAS協会となるのであり、宗派には属さないものの臨済禅の色彩が濃い。

「学行一致」については、岐阜県立吉城高等学校が校訓としているほか、「学行一致の誓ひは固し」という校歌を有する山口県立奈古高等学校がある。また、昭和十三年に開校された出雲大社の大社国学館は、現在は「健全な強い心身を養う「学行一致」の教育」を行なうことを目標としており、昭和五十一年に神社本庁が作成した『神職手帳』では、「神職が平素心得べき要件」の第二・第三条として、「二、常に国典を修め、徳性を養ひ、学行一致を心がけること。三、心身の清浄を期し、祭祀を厳修すること」と述べている。大社国学館と『神職手帳』は、「学行一致」とならんで「心身」の健全さを説いており、室蘭大谷高等学校の「報恩感謝、学行一体、自

己反省、心身壮健」とほぼ半分が合致しているのである。

三 「行」と「学」の「一如」

これらのうち、筆者が目にした範囲内で最も早い「学行一如」の例は、石川中学校である。『学校法人石川高等学校100年史』では、明治二十五年に同校の前身である石川義塾を創設した森嘉種は、「学行一如」を建学の精神とし、学問と行動が分離してはならないと学生に説くとともに自らも実践していたという。しかし、森が若き日に学んだ水戸の私塾である自強舎は、尊王愛国を説いて仏教を排した水戸学派に属するため、ともに仏教用語である「学行」や「一如」の語を森が早くから用いていたとは考えにくい。諸橋大漢和辞典でも、修行と学問の意で用いられた「学行」、および「一如」については、中国古典の用例はあげられていないのである。ただ、水戸学の基いを築いた朱舜水是、朱子学の素養に加え、陽明学に由来する強い実践志向を有していたため、水戸学では学問と実践の不可分を強調する傾向が強く、水戸学の聖典の一つとなった『弘道館記』（藤田東湖筆）でも、「神州の道を奉じ西土の教を資り、忠孝二无く、文武岐れず、学問事業、其の効を殊にせず」と説かれていることは有名である。上記の内容については、会沢安『退食間話』が「学問と事業と皆一致也」と述べていることもあってか、「神儒一致」「忠孝一致」

「行学一如」の歴史的背景（石井）

「文武一致」「学問事業一致」などと要約されることが多く、「学問事業一致」はさらに簡略化され、陽明学の「知行合一」に重なる形で「知行一致」と称されることも多かったようである。このため、森は「知行一致」を重視していたものと思われる。ところが、昭和八年に没した森校長の遺徳を讃えるため、石川義塾の後身である石川中学に昭和十五年六月五日に建てられた石碑には、「行学一如」の四文字が刻まれ、「文部大臣 河原田稼吉 題字」と記されている。

内務官僚出身の河原田が文部大臣を勤めたのは、昭和十四年八月から十五年一月までであり、その数年前には、東大医科の教授であった橋田邦彦が、国体教育を推し進めた日本精神派の文部官僚、伊東延吉の招きを受け、文部省が重視していた思想対策の委員会で発言するようになっていた。さらに橋田は、昭和十二年四月には伊東に懇願されて第一高等学校校長に就任し、その発言は教育界に影響を及ぼしていく。橋田は、河原田が文部大臣を辞して僅か半年後の昭和十五年七月に、第二次近衛内閣の文部大臣に任じられ、続く東条内閣でも留任し、日米開戦をはさむ激動の時期に三年近く大臣を勤めている。敗戦後の九月に戦犯として指名され、服毒自殺をとげることになる橋田は、若い頃から王陽明の『伝習録』を愛読しており、大正七年にドイツ留学より帰国して東大医科助教授となった少し後の時期から、生命の把握という問題

に悩み、偶然出会った『正法眼蔵』に打ち込むようになっていた。⁽¹⁰⁾その研鑽ぶりはめざましく、『正法眼蔵』関連の講義・講演・著作の活動を盛んに行なうようになったため、昭和十年十一月二十九日には、駒澤大学の仏教学会に招かれて「正法眼蔵の側面観」と題する有名な講演をするに至っている。この講演は仏教学会の年報に掲載されたほか、橋田の『正法眼蔵釈意 第二巻』（山喜房仏書林、昭和十五年）に収録され、本書は一年で十二版を重ねた。また昭和十二年二月八日にも駒澤大学で「道元禅師の教旨」と題して講演している。⁽¹¹⁾

その橋田の思想は、『正法眼蔵』と陽明学に基づく独自の立場から、「行」と「科学」の一体を説き、「一如」を強調してすべてを「行」のうちに統合し、日本人としての自覚に基づく「日本科学」を打ちたてようとするものであった。

吾々が日々やつて居ることが「行」として実現されることになれば、宗教と科学とは全く一如になり、人と自然とは一如になる、物心が一如になる。その物心一如といふことを「人」といふ立前から云へば身心一如といふ。……それが行である。……結局把まるものは、吾々の自己、即ち日本人といふことである（「行としての科学」）。

知行合一……其の实初めから知と行が分れて居るから合すると云ふ話になるのでありますが、……初めから一つであればこそ合するのであります。ですからさういふ意味から、合一という言葉を

離れて何かいゝ言葉はないかと云ふと、仏教における一如といふ言葉が一番いゝと思ひます。……人間の生命或は人間の活動といふ事を云ふのならば、「行」以外に何もないのであります。（「行」

前者は、昭和十一年十一月十一日に文部省の外局である教育学局が主催した日本文化教官研究講習会・自然科学第一回講習でなされた講演の一節である。この講演は、文部省指導下で日本文化協会出版部が刊行した国家主義叢書である「日本文化」の第一冊として、翌年七月に刊行され、その年の十二月には、橋田邦彦著・山極一三編『行としての科学』（岩波書店）に収録された。後者は、橋田の『碧潭集』（岩波書店）が昭和九年に出版されたことを祝う会での挨拶であり、昭和十一年刊行の橋田『空月集』（岩波書店）に収録された。道元思想の深遠さを説くこれらの書物は、折からの道元ブームとあいまって広く読まれ、道元の国家主義的解釈に拍車をかけた。

これまで見てきた「行学一如」「行学一体」「行学一致」「学行一如」などの語は、昭和十年代に国家主義が高まるにともなうて再評価が進んだ水戸学の影響に加え、右のような橋田の主張が文部省や著書を通じて教育界や一般社会に広まった結果、似たような表現が様々な文脈で使われるようになったものと思われる。文部省では、主に「行学一体」や「学行一如」などの語を使って学徒の勤労働員や神社参拝などを正当

「行学一如」の歴史的背景（石井）

化する傾向を強めていく。斬新な教育で知られた石川中学は、創設以来、農繁期には二週間休業して勤労させるなど、もともと実践志向が強かつたうえ、森校長の紀徳碑が建てられた時期には、日中戦争激化にともなう様々な勤労奉仕が加わっていたという。河原文部大臣が「行学一如」と揮毫したのは、そうした時期なればこそであろう。ただ、国体概念を叩き込むための教員再教育を指す言葉として用いられた「研修」の語が一般用語化したように、「行学一如」「行学一体」などは「皇民錬成」のような時局風な言葉ではなかったため、戦後になっても、しっかりした検証がなされないまま一般用語化し、新たな意味づけをされたうえで用いられ続けたのである。関口教授が紹介した「知識」の推測通り、「行学一如」は、確かに戦時中の標語に由来していた。

四 橋田邦彦の文部行政

文部大臣に就任した橋田は、「行」を強調し、国家主義と結びつけた独自の道元解釈を、文部行政に盛り込んでゆく。

師範学校をして真に教学一体の本義を具現せしむる道場たらしめ学行一如の本旨に徹して充分なる錬成を期するよう更に一段の努力を致されたいのであります。次に心身を一如とする健全有為なる皇国民の錬成を期するには体位の向上を目指して訓練を図ることが重要であります。（師範学校長会議に於ける訓示、『文部時

「行学一如」の歴史的背景（石 井）

報』七二九号、昭和十六年七月一日）。

「教学一体の本義」「学行一如の本旨」とあるのは、そうしたあり方こそ日本の本来の教育だとする考えに基づくものであり、直接には橋田が何よりも重視していた「教育勅語」、および、伊東が組織した国民精神文化研究所が中心となって「教育勅語」を柱としてまとめ、伊東自身が最終稿に何度も修正加筆を行った『国体の本義』⁽¹³⁾（昭和十二年三月）を意識していよう。心身二元論を批判する「心身（身心）一如」の思想も、戦時体制下の体位向上運動と結びつくに至っていた。

惟ふに明治維新以降外国文化の接取に急を要した余り、動もすれば教育が抽象的概念的な知識の授受注入に傾きましたことは、一面已むを得なかつたことであるとも云へるのでありますが、しかしそれがために日本人としての自覚を喚起するに甚だ欠けるところが生じたのであります。……然るに近來殊に満州事変を契機と致しまして国民的自覚が昂揚されますと共に教育の刷新が叫ばれまして……。斯る教育刷新の目標は……抽象的概念的な立場を具体的実践的な立場に転換せしむるに在るのであります。斯くして始めて教育に於いて真の日本人を育成することが出来るのであります。我が国教育の本然の姿を顕現すること、相成るのであります。（日本諸学振興委員会教育学特別学会挨拶、昭和十六年十一月十日）

これは『国体の本義』とほぼ重なる主張である。この立場は、戦局の悪化とともにいよいよ強調され、文部省の文書で

は勤労働員を主としつつ学徒出陣・集団疎開などをも「学」と一体になった「行」とみなす用例が増えていく。橋田が文部大臣を辞した翌年の昭和十九年二月十六日に、「勅令第八十号」として出された「国民学校令等戦時特例」では、

惟フニ行学ヲ一体トシ文武ヲ一如トシテ能ク皇国民ノ錬成ヲ効スハコレ我カ教学ノ本義ニシテ最近数次ニ亘ル教育改革ノ趣旨ニ此ニ在リ。

と述べ、学徒の「常時勤勞」「出陣」などは、行学一体・文武一如の錬成にほかならず、「我カ教学ノ本義」であることを強調している。しかしながら、勤労働員の激化によってもたらされた結果は、「学力低下」⁽¹⁴⁾であった。

橋田は、誠実で弟子たちに敬愛された人物であり、当時にあつてはすぐれた科学者であると同時にすぐれた『正法眼蔵』研究者であつた。ただ、『正法眼蔵』と陽明学の独自の解釈に基づく橋田の「行」重視の思想は、西洋の学問を批判し「教育勅語」を絶対の前提とする点で、無比の国体を強調する日本精神派の文部官僚たちに利用されやすいもの、また自分自身そうした方向へ流されるほかないものであり、「日本科学」をめざす橋田の試みが失敗したのは当然であつた。

1 関口雅夫「駒澤大学の「建学の精神」についての史的考察」（『駒澤法学』四卷一号、平成十六年十月）。駒澤大学電子図書

館 (<http://www.komazawa-u.ac.jp/~toshokan/el/index.html>) で閲覧できる。教授は本稿刊行直後に逝去された。

2 「知識」とは仏教学部の岡部和雄教授（現在は名誉教授）を指す。このことは、岡部教授ご自身に確認して公表の許可を頂いた。なお、「信誠敬愛」が陽明学的な言葉であることを岡部教授が早くから指摘していたことは、「信誠敬愛」の標語を批判した袴谷憲昭「建学の精神と仏教」（『教化研修』三十三号、平成二年三月）が触れている。

3 詳細は別稿で論じる予定である。

4 七十五号の記事については、皆川義孝氏のご教示による。

5 保坂玉泉「筆舌六十年誌」（『教化研修』七号、昭和三十九年五月）一四七頁。

6 『葦』三三三号、七号（上野慧賢『永遠の反省』、駒沢大学高等学校同窓会、一九七六年に収録。引用は本書による）。

7 谷耕月「行学一体を目指して」（『正眼短期大学論集』一号、昭和六十二年十月）。

8 真宗伝統の「報恩謝徳」でなく「報恩感謝」とあるのは、文部省『臣民の道』（昭和十六年七月）の表現によるか。

9 前田一男「教学刷新」の設計者・伊東延吉の役割」（寺崎昌男他編『近代日本における知の配分と国民統合』、第一法規出版、平成五年）。

10 松本皓一「『教育者』型人格における宗教的心念と実践の問題——無適・橋田邦彦と『正法眼蔵』」（駒澤大学仏教学部研究紀要』五十号、平成四年三月）ほか。なお、同「二つの訓——『典座教訓』と『俱学小訓』——」（『日本仏教教育学研究』十四号、平成十八年三月）が、「行学一如・知行合一」こそ「橋田の根幹」であったとするのは適切だが、「行学一如」の語そ

「行学一如」の歴史的背景（石井）

のものは橋田の著作には見えないようである。

11 この講演の印象については、山内舜雄「橋田邦彦と道元」（『禅文化』一六一号、平成八年七月）。

12 中村顕一郎「十五年戦争下の朝鮮・台湾における教員「研修」——国民精神文化研究所の役割を中心に——」（『創価大学大学院研究紀要』二十六号、平成十六年九月）。

13 久保義三『昭和 교육史（上）』（三一書房、平成六年）二九二頁、三九三—四頁。

14 寺崎昌男「第四節 高等教育諸学校」（寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育』、東京大学出版会、昭和六十二年）一九一頁。

〈キーワード〉 行学一体、行学一致、橋田邦彦、伊東延吉

（駒澤大学教授、文博）